児童後期（９～１１才）の発達としつけ

１．身体の発達

①一般的に元気溌溂として疲れを知らない。目が回るぐらいあちらこちら飛び回る。

②身長、体重は、この時期には、児童前期に比べると、ゆっくり増加する。しかし、姿勢は、一般に貧弱で脚が長く、身体の形がひょろ長くなりやすい。しかし、病気になることは少ない。逆立ちをしたり、木から跳んだり、何か成し遂げていく能力が、自分に加わっていくことに得意になる。

③９才児は、11 時間程度の睡眠をとり、１０才児は、それより半時間ほど少ない。

④１１才前後では、女子の成長は男子より１年ぐらい早い。

⑤３年生のころから細かい文字などに親しむことが多くなるので、視力の障害が、目に付きやすく、乱視の傾向もこのころから見られる。

２．社会的発達

①個人的な遊戯活動は、１０才ごろが頂点で、１０才前後になると、これにかわって組織的なゲームに興味を持つようになる。

②他人の存在を認識し、３年生を境として喧嘩の数は、ぐんと減る。しかし、５・６年生でも喧嘩しないのではなくて、喧嘩そのものの性質が変わってくるのである。

③男は男として、女は女としての相を表す行動や興味の違いが、ますます目立ってくる。男子は、粗暴で転げ回るようなゲームが好きだが、女子は、一般的にそんなゲームを好まない。

④グループを好むが、その組織は確たるものではなく、長続きもしない。人数は、３人から１０人位で集団に加わっていることを示す頭文字やバッジを大切にする。一匹狼的存在も現れる。

⑤同年齢の遊び仲間の間でつくられた一定の尺度で、社会的、知的な各種の事柄を判断しようとする。その結果大人を無視するよう名傾向になる場合がある。

⑥同年齢の仲間によって認められるとか、彼らから賞賛を受けたりするということについて特別に敏感である。

⑦リーダーが発生し、彼の意見は仲間の間に驚くほど重みを持つ。この時期をギャングエイジ（徒党時代）という。「仲間意識」で結束した仲間の間だけに通用する、ある種のきまり、秘密の共有財産や集合場所があったりすることも珍しくない。こういう仲間は、うまく指導すれば非常によいものになるが、失敗すれば不良化の温床になる。

⑧あまり身なりを気にしない。手が汚れていようと、下着が出ていようと、はだしで外へ出ようと平気である。

⑨それよりも衣服も持ち物もさまざまな活動もみんなグループの遊び友だちと同じで、自分自身で「これでよし」という状態でないと承知しない。そのために両親の指示や命令に抵抗したりすることも珍しくない。大人に依存することを恥と思い、両親が授業参観等で学校に行くことを嫌がる。

⑩５～６年になると、自分の家庭の経済状態が他家と比べてどの程度であるかを、だいたい理解するようになる。わがままに育てられた子どもを除いては、家庭の収入に不釣合いな品物をねだることは少なくなり、高価すぎるものを与えようとしても辞退する。

⑪５～６年の子どもが求めている両親は、幼児が求めるような保護的、権威的、指導的な親ではなく、子どもと同じ高さまでおりて、彼らの悩みや興味に共鳴してくれるような親である。「ぼくたちに本当のことを話してくれるなら尊敬する。」というのが彼らの考えである。

３．情緒的発達

①情緒は、ひとつの転換期に入って、非常に落ち着いた調和の取れたものになり、今までの自己中心的な幼児的な傾向から脱却する。少しぐらいのことで泣かなくなり、怒ることも身体的、物的原因から、社会的、道徳的なものにかわり、喧嘩も殴ったりしないで言葉を主とするものになる。激情を抑えることができる。

②３年生以上になると現実的な知識が確かになり、経験の範囲も広がるので、意味のない恐怖は少なくなる。

③自分の安定感のために、周囲のものの愛情を求め、友だちに嫌われること学級内で恥ずかしい思いをすることを怖れる。

④この時期の初めのころから男子は男子だけで、女子は女子だけで固まり、異性に対して敵愾心を持つようになる。女子の場合は、ごく短期間であるが、男子の場合は、その時期がやや長い。一般に男子が女子をいじめるのは、３年生ぐらいまでで、その後は少なくなる。

⑤同性の仲良しに対して何かの仕方で愛情を示そうとするが、その表し方は、さまざまである。たとえば、女子は、腕を組んだりするが、男子は、相手にパンチをくわせたりする。しかし、概観はどうであっても、彼らはそれによって友情を示しているのである。これが、特徴である。

４．知的発達

①自分の立場を変えて、一般的立場に立って物事を見ることができるようになる。

②あらゆる事柄の興味を示し、好奇心を持つ。だから知識時代といわれる。彼らの関心は大人と同じほど広い。しかし、理解は浅い。

③９才になると因果的観念が発達し、何にも魂があるといった汎神論的な考えはなくなる。

④９才のころは、滑稽な話、西部劇、おとぎ話、冒険物等に興味を持つ。１０才になると、想像するようなものでなく、事実についての興味を満足させるような旅行記、遠い国々の話、機械の話、伝記などに興味を持つ。男子は、科学についての興味がわき、これはずっと後まで続く。１１才では、冒険科学、家庭生活、自然などについて書かれた書物を好む。もちろん、漫画やアニメやゲームなどにずっと興味を示している部分も見られる。

⑤初歩的な抽象数を取り扱う準備ができている。

⑥意味や理由は理解しなくて、機械的な記憶がよく、有名人の名前や出身校、特技などをよく知っている。

⑦県とか国とかいっそう広い範囲の社会について興味を持ち始める。

５．しつけの要領

①社会的活動（子供会・YMCA など）に参加することに満足を感じる。大人の指導者は、そこに参加する子どもたちの相互の関係がうまくいくかどうかを決定する重要な意味と役割を持っている。

②近所の人々の集まりやクラブには、大変興味を持っている。そういうよい影響を受ける子どもたちは、相互の助け合いの気持ちが育成される。

③徒党時代の活動は、大人の目を避け、集団化するので、望ましくない方向へ進めば、不良化の危険があるが、その反面、人間の社会生活に必要な協力、同情、集団の誇り、自己犠牲、規約への順応などをこの集団内で学び取ることも多い。だから、禁止的でなく健全なグループ活動によって高い社会性を養うように指導するのがよい。

④しつけの第一歩は、よい友だちを選んで、親しく遊ばせて社会性を早く養うことである。子どもが、喜んで家に友だちを連れてこられるような雰囲気や環境を作る必要がある。

⑤「他人のものを取った。」という経験する子どもは多い。このとき、体罰を加えないで悪いことであることをやさしさのうちにも、厳然と徹底的に教えなければいけない。特に第１回目の「盗み」の措置が重要である。

⑥少年犯罪が社会問題として取り上げられる場合、この時期の子どもたちが多い。

⑦家庭内で何か責任のある役割が与えられ、しかもそれが、彼らの能力にぴったりとしていて、適当な成功感と自己価値観を味わうようなものであると、好ましい社会性の発達を促す重要な鍵となる。学級内においても同じことが言える。「自分の居場所」をつくってやることである。

⑧勉強する場所を作ってやりたい。子どもに自分だけの場所を与えてやることは、よい性格を作り上げるためにぜひ必要である。子ども専用の場所ができれば、自分のものと他人のものと区別するにもいいし、その場所だけは、子どもの責任においてきちんと管理させることもできる。

⑨学習面では、３～４年は、知っている知識をまとめる程度でよいが、５～６年では、ある程度予習をさせるようにするとよい。

⑩遺尿の癖が出る場合は、「大人になってまで、おもらしをする人はいない。だから大丈夫。」といって、具体的に「おもらし」をしないようにするためには、どうすればよいか、したらその処理をどうすればよいかを親と一緒に考えることである。

⑪下手ないいわけをいいはじめる。３年生ぐらいまでは、いいわけをせず、都合の悪いことはだまっている。４年生あたりになると自分のしたことを自分に都合のいいように、またおこられないように、いいわけやいいぬけをするようになる。こういうことを、まだ小さいからといって、いうことを正直に信じたり、小さいから仕方がないなどと見逃していると、子どもは、いつか、大人はだましやすいものだと思ってしまう。そうして、人前だけうまくごまかす癖がだんだん強くついていく。このような場合、「間違うことは誰にでもあることで仕方ないけれど、どうやったら一番間違えなくてすむか、今度からよく気をつけてごらん。いいわけをしないですむようにしよう。」と教えることである。

⑫仲間のリーダー格の子どもが喜びそうなものを次々と提供したり、玩具を持っていったり、お金を持っていったり、時には、親の大切なものを失敬して持ち出して、それでリーダー格の子どもを買収して、仲間に入れてもらって喜んでいる子どもがいる。その子どもが、グループの中でどのような地位を占め、何に頼ってその地位を確保しているのかをよく観察する必要がある。いじめにつながる場合が多い。